

池田会長全集十卷 下

「経王殿御返事」講義

文永十年八月 五十二歳御作
四条頼基並妻に与う

(御書全集一二四ノ一 一二五ノ一)
編年体御書 五六九ノ一 五七〇ノ一

題号の、経王殿という方は、日蓮大聖人の門下のなかでも有名な四条金吾のお子さんのことです。

四条金吾という方は、ひじょうに強信で、大聖人にたいそうかわいがられた方です。竹を割ったような直情径行の気性を持ち、主君には忠義な武士であり、武術にもすぐれ、また医術の達人でもありました。また酒の好きな方でした。

大聖人が竜口で首をはねられようとしたときも、四条金吾は、とるものもとりあえず、素足のまま、一目散に大聖人の御もとへ馳せ参じたのです。そして、大聖人のお乗りあそばされている馬の手綱にしがみついて、大聖人にもしものことがあるならば、自分も命を落とそうとの固い決心をもってお仕え申し上げたのです。

また、ひじょうに勇敢で、鎌倉中を折伏しきって歩いた闘士です。あまりにも折伏が激しく、また

同僚からやきもちをやかれて、讒言さんげんされて、ずいぶん苦しい思いをしてきております。

その折伏の結果によって、つけねられ殺されかけたことも再三あるのです。しかし、強信なる四
条金吾は、あくまでも大聖人のおおせどおりに、指導どおりに、信、行、學に励みきっていかれた模
範はんの方でありました。

今、私どもが一生成仏をめざして、宿命の大転換をするために、おのおのの幸福のために信心折伏
に励んでいます。が、どんなに折伏しようが、だれが私たちを殺そうなどという人がいますか。せいぜ
い新聞や雑誌に悪口を書かれるか、隣近所や親戚しんせきや友人などから悪口をいわれるぐらいなものです。
しかし、大聖人御在世においては、刀をもって殺されかねないほどの戦いをしたのです。それからみ
るならば、今の私どもの信心のありかたは、ひじょうに楽なのです。

そういう楽な信心ができる時代に生まれあわせて、一生成仏をするという決心をしたならば、少し
ぐらいなことで退転していくような人は、日蓮大聖人の弟子ではないと、私は思うのです。

この御書は、その四条金吾のお子さんが、からだが悪くなったので、日蓮大聖人がわが子のごとく
御心配あそばされて、四条金吾にたまわった御書なのです。ここでは、この対告衆たいこうしゆはいちおう、経王
殿として、お子さんの名前になっております。

其の後御をとづれきかまほしく候こいつるところに・わざと人ひとををくり給候たまひ、又何よりも重宝た

るあし山海を尋ねるとも日蓮が身には時に当りて大切に候

大聖人が四条金吾一家のことについて、経王殿のことについて、心配しておられた。そのようなきこうと思っておられたときに、わざわざ人を使わして、いろいろの報告をしてくれてありがとう。また、たくさんのお供養を、わざわざ届けてくれてありがとう——と。

大聖人が御供養をおうけになっている御書がたくさんございますが、大聖人はぜんぶ日興上人に、その供養のお金を渡して、広宣流布のために、折伏行のために、いっさいをお使いあそばされておられるのです。

このように、お弟子方が御供養をお持ちしたときには「ひじょうに助かるよ」とおおせです。功德をうけるのは、御供養を申し上げた信者です。大聖人がおうけとりくださるから、私どもに功德があるのです。その原理なのです。

日蓮正宗創価学会は、あくまでも日蓮正宗の信徒の集まりです。総本山の大御本尊に、そして御法主上人に御奉公申し上げていくのが、私どもの使命であります。初代の会長牧口先生、ならびに第二代戸田先生も、奉安殿の御供養、大講堂の御供養、五重塔の修復の御供養、また本日もお寺の御供養がありました。何十か寺の御供養と、その他かずかずの御供養をされています。立正佼成会や、霊友会や、国柱会や、生長の家や、その他のあらゆる邪宗教は、宗教をもって企業としております。しかし、創価学会は断じてちがうのであります。

社会の人々は、私どもの純粹なる信心ひと筋の姿を理解できない。あまりにも、乱れた世の中でありますし、悪い人々が多いからでありましょう。私どもの学会精神は、広宣流布の達成と、それから御本尊根本にして、人々の幸せを願う信心ひと筋の精神です。

総本山にどこまでも御奉公申し上げていくべき心で戦っているのが、初代の牧口先生以来の創価学会の伝統であります。

夫^{それ}について経王御前^{ごせ}の事・二六時中に日月天に祈り申し候

四条金吾のお子さんである経王御前のことについては、「二六時中」というのは朝も晩も一日中、ということですが、一日中心配しています。そして日天、月天にも、早く病魔を去らしめるために、病気が平癒^{へいゆ}するためにきちんと祈ってある、命じておりますよ、ということですが。

日蓮大聖人は、御本仏でいらっしゃる、いたがって、宇宙それ自体を動かしていくべきお力があります。太陽は大日天という、月は大月天です。私どもが拝んでいる御本尊のなかにも、大日天、大月天としたためられています。したがって、御本仏であらせられる日蓮大聖人から、大日天、大月天に命ずれば、即大御本尊の威力と同じすがたがあらわれてくるわけなのです。

先日のまほり守さんじ暫時も身を・はなさずたまち給へ

先日さしあげた、お守り御本尊を、けっして離してはいけませんよ。

お守り御本尊は、現在においては、日蓮正宗の大信者として功勞のあった人に、順次お下げ渡しを願うことになっておりますが、ここでおおせの「まほり」とは、いま皆さん方が拝んでおられる御本尊のことを意味するのです。同じと考えてよろしいのです。

御本尊を暫時さんじも離してはいけない。受持じゆじ即觀心そくかんじんです。御本尊を受持しきっていくことが信心である。それで初めて御本尊から守られるのです。どんな嵐あらしがあろうが、悪口があろうが、弾圧があろうが、御本尊を絶対に離さないでいく、それが信心なのです。それで仏になれるのです。守られるのです。

其の本尊は正法・像法・二時には習へる人だにもなし・ましてかき願し奉る事たえたり

その「本尊」とは、弘安二年十月十二日の一閻浮提えんぶだいせうよ總与の大御本尊のことと拝します。正法千年、像法千年の二千年のあいだに出現した迦葉かしよう、阿難あなんとか、天台、伝教とか、妙楽とか、そういう人々が

だれも顕^{あらわ}すことができなかった御本尊であるというのです。正法とは釈尊がなくなつてはじめての千年、像法とはつぎの千年をいいます。

この御本尊は、衆生を永遠にお救いくださるところの根本の法なのです。したがって、釈尊であるうが、天台、伝教であろうが、三世十方の仏さまであろうが、ぜんぶ、この御本尊を覺^{さと}つて仏になつたのです。

本尊ということについては、これは「功德聚^{くどくじゆ}」とも御書に説かれております。功德の集まり、との意味です。または「輪円具足^{りんえんぐそく}」ともいいます。すなわち十界三千の宇宙の法則が、そのまま御本尊にふくまれている、縮図されているのです。大宇宙の根本法則です。

また、本尊とは、根本尊敬、または根本尊仰^{そんぎやう}ということ、すなわち根本の本と、尊敬、尊仰の尊で「本尊」と申し上げるのです。

およそ宗教というならば、本尊がなくてはならない。また、何をもって本尊とするかによって、おのずと高低浅深があります。この御文におおせのように、いまだかつて存在したことのない最高唯一の根本尊敬の当体こそ、この御本尊である。一大事の因縁^{いんねん}によって、一切衆生を永遠にお救いくださる慈悲と大哲理をもって出現された、末法の御本仏であられる日蓮大聖人が、その御命をもって初めて顕された人法一箇の御本尊なのであります。この御本尊に南無したてまつる以外に、真に幸せになる道は絶対ないと、私は信ずるのです。

師子王は前三後一と申して・ありの子を取らんとするにも又たけきものを取らんとする時も・いきをひを出す事は・ただをなじき事なり、日蓮守護たる処の御本尊を・したため参らせ候事も師子王に・をとるべからず、経に云く「師子奮迅之力」とは是なり

「前三後一」とは、前に三步進み、後ろに一步用心のためにさがる、そのように慎重にかまえて、全力で獲物をとらえる姿勢を示しています。師子王は小さな蟻をとる場合でも、また猛獣に襲いかかる場合でも、同じように、全力を尽くして戦うといわれています。

この師子王の前三後一という言葉は、法華経をたたえている涅槃経にでてくるのです。そのような力をもって、日蓮大聖人が全身全霊を打ち込んでしたためた御本尊なのだ、すごい力があるのだ、とのおおせなのです。

また「師子王」の師とは、日蓮大聖人です。御本尊です。子とは子供で、弟子の意味になるので、弟子が、師匠である大聖人について、一生懸命、信心に励んでいくならば、王のごとく悠々たる絶対の幸福境涯にいたる、このように拝することもできるのです。

「師子奮迅之力」とは、法華経涌出品の言葉です。御本尊の偉大な力用を意味するのです。師子王の奮迅の力をもってあらわした御本尊なのです。このように説かれておられるわけです。

又此の曼茶羅まんだら能く能く信ぜさせ給うべし

この御本尊をよくよく信じていきなさい、とおおせです。

信とは何か。「無疑むぎ曰いわ信しん」——疑わざるを信という。どんなことがあっても、御本尊に祈りきって疑わない。その信心なのです。願いはぜんぶかなうのです。

それを御本尊に題目をあげながら、どうも紙を拝んでいて、病氣は治りそうもないな、などと思えば、治りそうもないという思いのほうに通じてしまうのです。ですから疑ってはいけないのです。

南無妙法蓮華經は師子しし吼この如し・いかなる病降さはりをなすべきや

「南無妙法蓮華經は師子吼の如し」

有名なお言葉です。生命力の弱い人、信心の弱い人は、この一節を暗記することですね。

南無妙法蓮華經という仏法は、「師子吼の如し」——百獸の王である獅子が吼はえているような力があるのだ。師子王が一声吼えれば、百獸はこわくてぜんぶ逃げてしまう。と同じように、題目を唱えるならば、どんな病魔、悪鬼魔神も逃げていくのです。

戸田先生は、「南無妙法蓮華經と唱えるときに、たとえていえば、この脊椎せきついを中心にして、放射線が、グリーンと体内から宇宙に発散していくようなものだ」というふうに話されたこともあります。

この大宇宙の運行、その本源力が、南無妙法蓮華經です。私たちが御本尊にむかって、南無妙法蓮華經と唱えたときに、大宇宙の運行と合致する自分自身の生命の本源の力が出てくるのです。

だから、「いかなる病さはりをなすべきや」です。病魔などは逃げていってしまふ。それほど力がある。また病魔を克服していく、その力があるのだとおおせです。

鬼子母神きしもじん・十羅刹女じゅらせつにょ・法華經の題目を持つものを守護すべしと見えたり

これは法華經の陀羅尼品の約束なのです。きちんと御本尊に題目を唱える人を、いっさいの諸天善神、十羅刹女、鬼子母神等が、ぜんぶ、守ってくれます。

私どもは御本尊を拝んでおりますから、鬼子母神も、十羅刹女も、諸天善神も、あらゆる仏、菩薩も、私どもを守ってくれているわけです。ですから、御本尊を信じきってしまえば、悠々たるものです。經文にはっきり約束があるのです。

十羅刹女とは、鬼子母神の十人の娘です。子供です。この鬼子母神と十羅刹女が、御本尊護持の者を守る。この經文の約束に違たがえず、經王殿も守るのですよ、との大聖人のおおせなのです。

幸
さいはいは愛染あいぜんの如く福は毘沙門びしゃもんの如くなるべし

幸福境涯をひらき、幸福の生活になることは、愛染明王あいぜんみょうおうのごとく、また福運を積み、福德のすぐれたことは、毘沙門天のようになる、とのおおせです。

愛染明王も、毘沙門天も、幸福をつかさどる働きを示します。私たちの生命にも、毘沙門天、愛染明王が具わっている。御本尊にも、愛染明王は左端に梵字で、毘沙門天は左上に、きちんとしたためられております。

願いがかなって幸福を感じるのみならず、人生全体が福運に満ちみちていく、そういう生活にかならずなるのだということです。これも御本尊の偉大な功力であります。

いかなる処にて遊びたはふるとも・つつ巻があるべからず遊行ゆうぎようして畏れ無きこと師子王おその如くなるべし

どんな時代がこようとも、どんなところにいようとも、いつも楽しみきっていける。悠々たるもの

です。なにもこわいものはない。御本尊さえ拝んでいれば、諸天善神の加護が絶対にあるのです。

私どもの人生の目的は、信心の目的は、仏になって最高の永遠の幸福をつかむことです。毘沙門天や愛染明王の働きのように、幸福生活、福運の生活になることは当然なのです。

悠々と自由自在にこの人生を生きていく姿が、ちょうど師子王のごとき姿なのです。師子王はどこへいっても、百獣がこわがって逃げてしまう。師子王が威風堂々と悠々と生きていくように、私どもは、そのような師子王のごとき人生が送れるのだというおおせです。

十羅刹女じゅうせつにょの中にも皐諦女こうだいによの守護ふかるべきなり

四条金吾のお子さんでありますから、鬼子母神の十人の子供である十羅刹女のなかでも、皐諦女の守護がとくに強いであろう。かならず経王殿の病氣は治るはずだとおおせです。皐諦女はひじょうに顔かたちがきれいだといわれております。

ただ
但し御信心によるべし

ここが問題なのです。ただし、信心によるのです。ただし書きがあるのです。

ある御書には、「叶^{かな}ひ叶はぬは御信心により候べし全く日蓮がとがにあらざ」(御書全集一二六二頁)とおおせであります。すなわち、どんな願いでもかなう。ただし、おのおのの信心による。功德をうけられないのは御本尊のせいではないよ、とも明確にお述べです。

信心の姿には二通りある。潔^{いさぎよ}い信心と、濁^{にご}れる信心です。清らかな水には、月がきれいに映^{うつ}る。濁った水には、月が映らない。そのように、御本尊の偉大な功力を、ひきだせるかどうかは、こちらの信心にかかっているのです。

潔い信心とは、清らかな水が流れるような信心です。朝晩の五座三座の勤行をまじめにいたし、学会の指導どおりに、信心に、折伏行に励んでいる人は、潔い信心、清らかな信心です。その人には功德は絶対にあるのです。

濁れる信心とは、朝晩の勤行もろくにしない、折伏もしないという人です。折伏をするということも、なにも学会が発明したわけではありません。日蓮大聖人のおおせです。また釈尊の經文にも、はっきりしています。それ以外に、根本の修行はないという意味なのです。修行しないで仏になろう、功德を受けようなどということはおこがましいかぎりです。働かないで月給をくれというのと同じなのです。

濁れる信心の人は功德がありません。それは批判している人か、折伏しない人か、怨嫉をしている人であり、そういう人は、顔色も悪いのです。もっともかわいそうな人です。

なにも私どもは、信心してくれといったおぼえはありません。ご紹介は申し上げたのです。批判されるべきなものありません。あくまでも自分のための信心です。日蓮正宗のために信心してくれとか、創価学会のために信心してくれとか、そんなことは、ひとこともいいません。

そのほか、広宣流布を実現しようということは、日蓮大聖人の民衆救済のための至上命令です。それは合言葉としていいます。しかし、自分のこともできないで、広宣流布のためなどということは、すこし話が大きすぎるのです。どうか、自分自身の幸福のために信心していただきたいと、こう申し上げるのです。それが結局は、広宣流布の前進にも、ぜんぶ通じるのです。

そのためにも、どうか信心の純粹な先輩、よき同志についていてください。

つるぎ剣なんども・すすま不進ざる人のためには用る事なし、法華經の劍は信心のけな勇げなる人こそ用る事なれ鬼に・かな鉄棒ぼうたるべし

いくら名刀をもっていようと、戦おうという勇氣がなければ、その名刀の価値はありません。なら必要なくなります。これは当然です。

御本尊を信心するということも同じです。大きい鐘かねがあっても、そっとたたけば、その反響は小さい。力いっぱいたたけば、その反響も大きい。そのように、信心を強くすればするほど、それだけ功

徳も大きい。弱い信心の人は、それだけの小さい功德である。

よく恩師戸田先生は「私の功德は、公会堂いっぱい功德を受けている。あなた方の信心の功德は、小指ぐらいだ。もっと、もっと、たくさん功德をもらったらどうですか」と、このように指導してくださっております。

御本尊は宇宙大の功德をお持ちになっていらっしゃるのですから、遠慮しないで、自分自身の宿命転換のためにも、罪障消滅ざいしょうしょうめつのためにも、大功德を受けるためにも、私どもは歓喜をもって信心修行に励んでまいりましょう。

「鬼に・かなぼうたるべし」とのおおせに、勇氣が凜々りんりんとわいてくるではありませんか。

日蓮がたましひをすみすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意みこころは法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし

「日蓮がたましひをすみすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」

これは有名なお言葉です。「日蓮がたましひ」の「たましひ」とは、生命と訳すのです。日蓮大聖人の御生命を、墨にそめながしてかきあらわされたのが、日蓮正宗の御本尊なのです。日蓮大聖人のおおせどおりに、御相伝そのままに伝わっている御本尊です。

しかし、池上や身延や中山など、日蓮宗となる邪宗日蓮宗各派には、日蓮大聖人の残された本尊はないのです。マネをしてまったくのニセモノを拝ましているのです。そのうえ狐きつねを拝ませ、狸たぬきを拝ませ、蛇へびを拝ませている。ぜんぶ、魔の姿です。この大聖人の御文からみて、それがどれほど邪道であり、恐ろしいことであるかしれません。

あくまでも、「信じさせ給へ」とおおせどおり、日蓮大聖人おしたための御本尊に南無することこそが、大聖人の教えどおり信心する絶対の道です。大聖人は「日蓮を用いぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし」(御書全集九一九頁)と厳しく戒めておられます。

「仏の御意は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし」

これは、むずかしくいいますと、種脱しゅだつ相對という法門です。脱益だつやくの仏法と下種家げしゅけの仏法との相違なのです。この御文を拝するならば、あくまでも日蓮大聖人が、末法の仏さまであって、釈尊は脱益の仏である、なんら末法の時代には関係がないということが、明確にわかるのです。

「仏の御意は」——釈尊の本意は、法華経二十八品である。脱益です。

「日蓮がたましひは」——日蓮大聖人の究極は、南無妙法蓮華経という五字、七字の法華経です。これ三大秘法の御本尊です。

それなのに、身延では、三宝といって仏・法・僧をたてるのに、仏の宝を釈尊とたてるのです。釈迦像を五百塵点劫の教主釈尊としてたてる。法の宝をば本迹一致の妙法とたてる。これらはひどい邪義です。「本迹の相違は水火天地の違目なり」(御書全集九九六頁)と、はっきり大聖人は打ち破っている。

らっしゃいます。

それから、僧の宝をば日蓮大菩薩とたてている。日蓮大聖人を仏と仰がないで菩薩とたてる、これまた、大きい邪見です。このように、大聖人の法門をまったく知らないのです。

日蓮正宗の仏・法・僧は、仏の宝は久遠元初くおんがんじよの自受用報身如来じじゅうほうしんにょらい、即日蓮大聖人です。法宝は寿量文底秘沈の大法、事の一念三千の南無妙法蓮華經。僧宝は第二祖御開山日興上人になるのです。これが大聖人の仏法をそのまま受け継いだ日蓮正宗の正しいあり方なのです。

妙樂云く「けんぽんおんじゆ願本遠寿を以て其の命と為す」と釈し給う

妙樂大師は、天台宗の第九祖で、おおいに天台大師の仏法を宣揚した方です。天台大師滅後二百年ぐらい後に中国唐代に出現しました。

その妙樂大師は「法華文句記」に、本地の遠寿を願すことをもって、その根本となす、と解釈している。

仏法には八万法藏という膨大な經典がありますが、その根本が南無妙法蓮華經である、すなわち御本尊になるのです。久遠元初以来の大生命哲理をもって、仏法の極意ごくいとなすのだとの意味です。

経王御前には・わ^禍ざはひも転じて幸となるべし

この御文は変毒^{へんどく}為薬^{やく}の法門です。経王御前が病氣であります。その禍^{わざわい}を転じて、かならず幸福になりますよ、病氣が治ることはまちがいないというお約束のお言葉です。

私どもが、よく「罰^{ばつ}即利益^{そくりやく}」とか、「変毒為薬」——毒を変じて薬となす、といいますが、その力をお持ちくださっているのが御本尊、妙法なのです。

妙法の妙とは、不可思議です。われわれの頭ではとうてい考えられない法です。私どもは過去^{おんの}遠劫^{えん}の罪業によって、いろいろな宿命をもっています。貧乏であるとか、病氣であるとか、人にしいたげられるとか、そういうような禍や罰や毒の宿命をぜんぶ転じて、幸福、利益にかえていく、これが仏法の極理なのです。

皆さん方は、今、おのおのの生活のうえで、宿命と戦い、いろいろな禍や苦しみがあると思います。が、その罰をぜんぶ利益に、幸福に転じきっていく、強い強い信心をしていただきたいと、私は願うものです。

あひかまへて御信心を出し此の御本尊に祈念せしめ給へ、何事か成就せざるべき、「充^{じゅう}満^{まん}其^こ

願・如清涼池・現世安穩・後生善処」疑なからん

「あひかまへて御信心を出し此の御本尊に祈念せしめ給へ」

またここで「信心」のお言葉があります。しっかりと信心をして、この御本尊に祈念していきなさい、祈り念じなさい。願いきっていきなさい。かならずよくなるのですから、と。

途中で休んでしまう人は功德がないのです。もうすこしのところで、挫折してしまうのです。「こんなに信心をやったけれども」「これだけお願いしたけれども」という愚痴をいう人がいる。しかしその尺度は、どこにあるか。「こんなにやったけれど」という基準は、どこをもっているのか。大聖人よりも、よけいに信心したか。だれよりも、よけいに信心をやったのか。となれば、そうはいえないと思うのですね。

これだけやったけれども、まだ願いがかなわない。それほど自分は罪業が深いのだから、もっと勇気をだして、願いがかなうまでだれよりも御本尊に祈りきっていこうという心が、けなげな信心ではないかと、私は思うのです。

「何事が成就せざるべき」

短い御文であります。大聖人の絶対の御確信があらわれています。御本尊にきちんと御祈念しきっていくならば、どんなことでもかなわないわけではない。なんと自信にあふれた明らかな文証でしょうか。「祈として叶わざるなし」と日寛上人がおおせになりましたが、大聖人がこの「経王殿御返事」

に、このようにはっきりと述べられていることなのです。

そのつぎに「充滿其願・如清涼池」——その願い充滿して、清涼池の如し、と読むのです。これは、藥王品の經文です。

ぜんぶ、自分の願いがかなって満足しきって、物心ともに幸せにみちあふれていく姿は、清涼の池に入るがごとく成仏の境界に入るのである、というのです。

それから、「現世安穩・後生善処」というのは、藥草喻品の經文をひかれております。

「現世安穩」とは、この世で物心ともの幸福生活をしきる、そして「後生善処」は、来世もまた、幸せなところへ生まれてくる、御本尊のおわしますところへかならず生まれてきて、また幸せな生活をしていけるという經文です。それは「疑なからん」と、この御文は絶対に疑いないのだとおおせでございます。

又申し候当国の大難ゆり候はば・いそぎ・いそぎ鎌倉へ上り見参のほ けんざんいたすべし

「当国の大難」と記されていますように、大聖人は、このときは、佐渡の国へ流されておられる重大なときでありました。御自身が最大の艱難辛苦をうけられているにもかかわらず、「佐渡の国から許されて鎌倉へ帰ったならば、すぐにお会いいたしましょう」という御慈悲あふれる激励をされている

のです。

私どももまた、大聖人のこの御慈悲の万分の一でも、まねごととしても実践していききたい。同志の人々、信心がまだ強くない人、また信心をよく知らない人々に対して、御本尊をしっかり拝んで幸せになるように、一生懸命に、真心をこめて指導の任にあたっていかなばならないと、痛感しております。

法華經の功力を思ひやり候へば不老不死・目前にあり、ただ歎く所は露命計りなり天たすけ給へと強盛に申し候、浄徳夫人・竜女の跡をつがせ給へ、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、あなかしこ・あなかしこ。

八月十五日

經王御前御返事

日 蓮 花 押

「法華經の功力を思ひやり候へば不老不死・目前にあり」

こうした大御本尊の偉大なる功力を考えるならば、「不老不死」——老いず死なずということとは、ひじょうに深い意味があるのですが、それは別として、簡単にいえば、絶対の幸福になることはまちがいない、ということです。仏になることはまちがいないのです。

いろいろな難があるけれども、病氣や事業の失敗や、また三障四魔などの難があつて苦しいときこそ、御本尊に願いきつていくならば、「佐渡御書」にも「師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし」（御書全集九五七頁）との御文もあるとおり、かならず幸せになることはまちがいないのです。しかもそれは、「目前にあり」といわれて励まされています。わずかのしんぼうなのです。

「ただ歎く所は露命計りなり」

ただ心配することは、その人の寿命である。今世の寿命じゆみようというものはきまつております。五歳で死ぬ人もおります、二十歳で死ぬべき宿命の人もおります。八十の寿命の人もおります。

寿命品には「更賜寿命」——更に寿命を賜たまわん、との文もあります。

御本尊を拝するならば、寿命を、五年でも、十年でも、十五年でも、その人の信心によって延ばしていただけるのです。また、そういう証拠はたくさんあります。大聖人は仏さままでいらっしゃいますから、よくその寿命もおみえになるのです。だから、心配することは、その人の寿命である。宿命である。だが「天たすけ給へ」と強盛に祈つてあげます、との御慈悲あふれるお言葉です。

「浄徳夫人・竜女の跡をつがせ給へ」

浄徳夫人も、竜女も、法華経に説かれています。女人です。妙莊嚴王みょうしょうごんのうの奥さんが、浄徳夫人です。竜女も八歳の竜女といって、提婆達多品に説かれている。そこに出現すべき女性の信者です。二人とも、やはり法華経によって、仏になったのです。

同じように、あなたも御本尊にすがりきつて、仏になりなさい。生命は永遠なのだ、かならず幸せ

になれるのだとのお言葉です。

そして「南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、あなかしこ・あなかしこ」でおわります。

(昭和三十五年九月八日)